

4章 「振り返る」

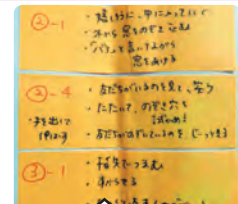
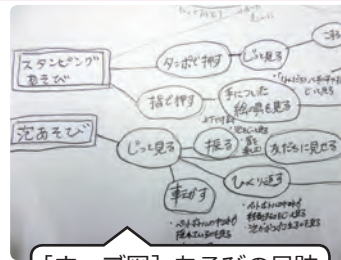
育てた野菜の種から育てよう ～あそびの足跡～

子どもたちの「科学する心」を育むために、「実態やねらいに基づく計画をもち、子どもに寄り添って実践し、子どもの姿や保育の記録を基に振り返って評価し、保育の改善を図る」という、次期「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」で示されるPDCAサイクルを確立している実践を紹介いたします。この園では、前年度の保育を振り返って評価し、「あそびの足跡」というウェブ図を作成する改善策に繋げて実践しています。

社会福祉法人ゆずり葉会 幼保連携型認定こども園 深井こども園 3～5歳児

振り返る1：前年度は、「遊びの継続」「育ちの継続」に着目したことで、子どもの育ちを意識し、保育の喜びを味わいながら取り組むことができた。だが、「継続」ということを意識しすぎて、活動の中で広がった他の遊びでの子どもたちの様々な気付きや体験のチャンスを、無意識のうちに見逃していたのではないかと課題をもった。そこで今年度は、テーマを「あそびの足跡」と設定して保育に取り組むことにした。

工夫1：子どもたちが興味をもっている現在の遊びを起点として、今後の活動内容の広がりを予想し、「あそびの足跡」としてウェブ図に示す。保育者が保育の振り返りをしながら、次の活動の広がりを予想し、物的、人的環境の準備を行うことで、子どもたちの活動の中での気付きや育ちにどのような変化が見られたかを整理して、保育者間で共有する。



子どものつばやき・表情を場面ごとに記録する

事例1 ダンゴムシって葉っぱを食べる 3歳児 5月～6月

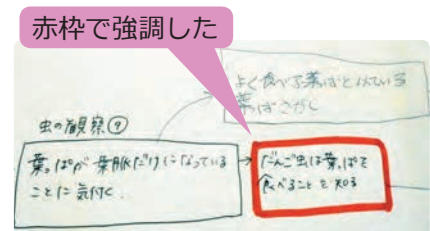
雨の日の園庭を探索していると、葉っぱの下に今までに見たことがないくらいたくさんのダンゴムシを発見した。「すごい！」と驚いた子どもたちから、「飼ってみたい！」という声が出た。昨年度の経験から、「土を入れないと!」「葉っぱを入れないとお腹が空く」「石も入れないと登れない」と、子どもたちは積極的に飼育ケースに棲み処を用意し、飼育を始めた。

毎日、観察をしていると、「白いダンゴムシがいる」ことを見付けた。白いダンゴムシでも、よく観ると動く虫と動かない虫がいることに気付く。また、別の日は、ダンゴムシの赤ちゃんが生まれたことに気付き、喜ぶ。いろいろなことを感じて気付いたことを、友達や保育者に伝えたり、図鑑を見たりする。

観察を続けていることで、以前から飼育ケースに入れていた落ち葉が葉脈だけを残して無くなっていることに気付いた。「ダンゴムシって本当に葉っぱを食べてるんや」と気付き、実際に目にして体験したことで、図鑑の知識しかなかったことが確信に変わったようだった。

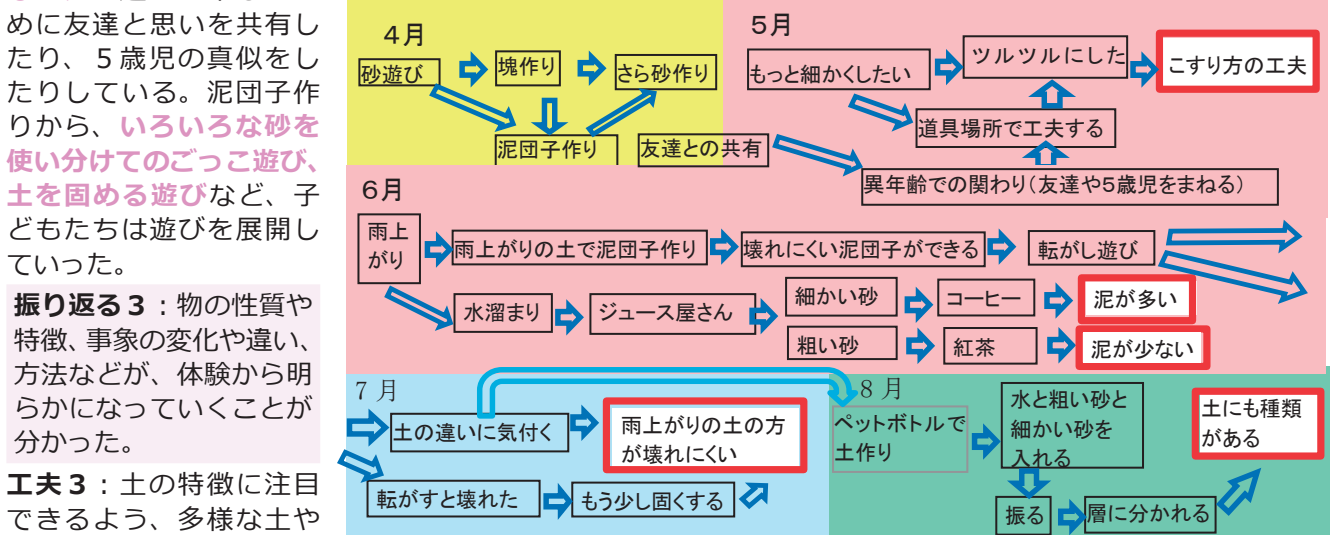
振り返る2：「あそびの足跡」のウェブ図から、「子どもが遊びを通して気付きや体験を重ねていく中で、大きく成長した瞬間」が見えてきた。

工夫2：見取ったその瞬間を、「気付きが確信・自信に変わった瞬間」として記録を赤枠で強調する。



事例2 土にも種類がある 4歳児 4月～8月

子どもたちは、「○○を作りたい」という思いをもって遊ぶようになり、遊び方や道具を工夫するようになった。遊びを楽しむために友達と思いを共有したり、5歳児の真似をしたりしている。泥団子作りから、いろいろな砂を使い分けてのごっこ遊び、土を固める遊びなど、子どもたちは遊びを展開していった。



振り返る3：物の性質や特徴、事象の変化や違い、方法などが、体験から明らかになっていくことが分かった。

工夫3：土の特徴に注目できるように、多様な土や教材を設定する。

事例3 育てた野菜の種 5歳児 5月下旬～6月

昨年はキュウリの栽培をしたので、今年をもっと多くの野菜を育てたいと、キュウリ、ジャガイモ、トマト、ゴーヤ、ナスなどを栽培した。観察や野菜の世話を毎日重ねたことで、収穫の喜びは大きかった。キュウリとトマトを収穫した時、縦に切った断面と横に切った断面が分かるように、保育者が子どもたちの前で切った。子どもたちはみな、**野菜に注目して、「模様が違う」「種の数が変わった」と、気付いたことを言った。**トマトの種は分かるが、キュウリは、種と気付かず“模様”という友達に、「種やで」「そんな形してるもん」「(野菜の断面を描いた絵本を見つけ)ほら、やっぱりこれは種やで」と話す姿があった。**日頃食べているトマトやキュウリの中に種があることが不思議な様子で、野菜の形や大きさによって違うことにも驚いていた。**その後も、**緑のまま落ちてしまったトマトと赤いトマトを比べて、「緑のトマトにも種がある」と驚いたり、種の大きさや数に気付いて話す姿**があった。どちらが美味しいか、赤いトマトは食べ頃で、緑のトマトは、「キュウリの味がする」「少し硬い」ということが分かった。

振り返る4：夏野菜の栽培、収穫を経験し、野菜の断面を見て、野菜の中にある種の存在に興味をもった子どもたちの姿が見られた。

工夫4：種に関心をもち始めた姿から、いろいろな種に触れることができる機会を作る。

展開1 いろいろな種

ゴーヤの収穫：「キュウリみたいになってる」「種が入っていると思う」「中も緑色かな?」「家で食べた時は、中に何も入ってなかったで」など、子どもたちから様々な意見が出る。初めて中を見た子どもは、柔らかい綿のようなものに種が包まれていることに驚く。「やっぱり種がある」と、スプーンで種を取り出してみると、種が皮のようなものに包まれており、「**これ(皮)を取ったら、硬い種がある**」「**種もゴーヤの匂いがする**」と不思議そうに話し、**ゴーヤの種のでき方に関心**をもち、観察していた。

ゴーヤにも種があることを知って、他の野菜にもどんな種があるのか興味をもち始めた。「この前、カボチャの中に種あったで!今度持ってくる」とAさんの言葉をきっかけに、家庭で食べた野菜や果物の種が集まってくる。**集まった種の大きさ、形、数、手触りなどを、友達と一緒に手にとり見比べる。**「同じモムの種なのに大きさが違う。こっちは、まだ小さかったのかな」「種は真ん中に入った」「キュウリ、メロン、ウリの種は似てる」「ボコボコしているのと、ツルツルしているのがある」「振ったら音が鳴る」「小さい種はたくさんあって、大きな種になると数が少なくなるのかな」などと、**たくさんの発見や気付きがある。**



皮の色は違うのに、中は同じ色だ



種の周り、グニュグニュしている

展開2 キュウリの種を植えてみよう

収穫して食べたキュウリの種に気付き、この種でキュウリが育つか試すことになる。**植える前に乾燥させているキュウリの種の色が少しずつ変化するので、子どもたちは、「もう植えてもいいかな?」との疑問や、「もう少し待った方がいいよ」といった考え**をもち、観察している。そこで植える種と、植えずに観察をする種に分けることになる。また、お米ではモミを水に浸けていた経験を思い出し、さらに残った種は水栽培として観察する。その他のいろいろな種も水栽培で育てて観察する。

植えたキュウリの種から、芽が出てこない。「種が小さいから芽が出ない」「キュウリが小さいから種も小さい」「前は春に植えたから、もう遅いと思う」「キュウリを大きくしたらいいと思う」と話し、考え合せて、種が大きくなるようにキュウリが大きくなるまで育てて、その種を育てることになる。

3週間観察したが、種は芽を出さないのので、みんなでJAの種博士の話聞くことにする。そして、種博士に教わった方法でキュウリの種を取り、水に浸けて選び、乾燥させて紙に包んで瓶に入れて保管した。「涼しい所に置いて、1年生になる時にきりん組(4歳児)さんに渡そう」と話し合った。

[考察] **振り返る：**子どもたちの思いは、“種から育てたい”から“4歳児へ引き継ぎたい”という思いに変わった。その過程で、子どもたちは様々な方法を試し、失敗や思うようにならない体験をした。みんなで知恵を出し合い、調べ、違う方法を考え、発想するなど、長期間にわたって取り組み、成長する姿があった。ここまでの活動で、子どもたちは、「育てた野菜の種で育つ」という「確信」にはいたらなかった。しかし、種博士から学んだことにより、「引き継ぐ」という考えをもち、活動を続けることに繋がった。

改善：子どもたちが興味をもったことを探究し、考えを試し、夢中になって遊べるように、これからも子どもたちの声に耳を傾け、思いを試せる環境を用意していきたいと思う。